



「おじさん」が変わらなければ

今回は、あえてこれまで書かずにいた永田町の話を初めて取り上げます。

民主党の古本伸一郎衆院議員(50)は、2003年に初当選する前はトヨタのサラリーマンだった。入社したのは男女雇用機会均等法が施行された翌年だ。けれど、「知らず知らずのうちに、性的役割分担の意識があった」という。一男一女がいるが、「子育ては妻にまかせっぱなし」。

その古本氏が、今月3日、衆院内閣委員会でこんな質問をした。女性活躍推進法案の採決を前にした審議の時だ。

「私自身、子育てにはほとんど、いや全く参加しなかった深い反省に立ち質問します。家事労働は女性がするものという先入観、男性の意識が変わらない限り、家事労働の負担軽減にならない」

自民党の井上信治委員長(45)のほうを向いた。「委員長はお子さんのお弁当を作って子育てされましたか」

井上氏「心がけがあまりよくないものですから、弁当はつくっておりません」

続いて、理事の民主党・泉健太氏(40)を指名した。

泉氏「弁当はまだ子どもが小さいのでありませんけれども、毎週土曜日は私が朝ご飯をつくっています」

古本氏はたたみかける。「委員長はキャリア官僚でしたよね。本音が聞きたいんですよ。僕は、男性の問題だと思っているんです」

井上氏「15年前まで外交省に勤務しておりました。なかなか両立は難しい、そういう環境にあった

と思います」

古本氏に聞いた。なぜそんな質問を? 「法案を作っているのはほとんど男性。その男性、しかも僕らくらいに『おじさん』が変わらなければ、女性が活躍する土壌もできないと思っただんです」(ふだん「おじさん」に囲まれている私・秋山も激しくそう思う)

厚生労働省の調査では、男性が一日に4時間家事をしたら、仕事を続ける配偶者は7割を超え、第2子以降の出生率も約10%から55%に上がるといふ。

民主党はこの法案に、「男女の『職業生活と家庭生活との円滑かつ継続的な両立が可能になることを旨として、という修正の原案をつくり、与野党は合意して全会一致で可決した。委員会の後、古本氏はほかの男性議員からも「聞いていて胸が痛かったよ」と話しかけられた。

女性も男性も生き生きと仕事と生活を両立するには、性的役割分担の意識に加え、長時間労働の問題もある。

国会で何を質問するか省庁に事前に伝える「質問通告」。質問の前日ぎりぎりの通告は、官僚の深夜労働の原因でもある。国会戦術からみても簡単に前倒しにはしにくい。でも、全部の質問通告がぎりぎりでもなくとも思う。

「女性の活躍を支援する法案の委員会なのだから」と、古本氏は泉氏と、内閣委員会では独自に通告は2日前にすることを提案するという。自民党の理事は、厚労大臣としてワーク・ライフ・バランスに取り組んだ田村憲久氏だ。こんな国会審議もある。